
恋模様

sakurasaku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋模様

【コード】

N9886G

【作者名】

sakurasaku

【あらすじ】

翠風高校に通うごく普通の女の子岡本雫ある日から悲しい恋が始まっていた……。

第1話 始まり

ある天気の良い日

私は彼氏ができた。

けれどこれが彼と周りをも傷つけることになるなんて……。

平成17年の暑い夏の日、話の始まりの事件が起きた。

この話の主人公、岡本雫は翠風高校に通うごく普通の女の子だったのだが今日から普通じゃなくなるなんて想像もしなかった……。

「おっはよー」

「雫おはよー」

「今日も元気がいいね！」

はじめにあいさつをしてくれたのが上原花蓮、雫の一番の親友だ。

「よっ今日は一段と暑いのお前が来たお陰でもっと暑くなった」

「悠はうるさい！！人をいっつもばかにしてさっ」

今話した男子は悠こと西濱悠だ。

「悠は雫いじるの好きだね」

「だって岡本おもしろいしー」

「おもしろくなーい！！」

「あははたしかにね」

「花蓮も納得しないでよー（泣）」

「そういえば悠って雫のこと名前で呼ばないよね」

「あっそういえば……。名前でいって言ってるじゃん」

「だってねーなんかヤじゃね??」

「ていうか名前で呼んで！苗字ヤだし」

「じゃあ呼んでやるよ」

「なんか上目線だし……」

「だって上だしー」

「はあく！？むかつくー!!」

そんなこんなで放課後……。

「鞆ー靴箱に手紙はいつてるよ??」

「えっうそだねから??」

「名前は書いてない……けど放課後体育倉庫前で待ってますだってさ」

「ほんとだ書いてない……。」

「これ絶対告白だよねー」

「まつさかー」

「もちろん行くんでしょ??」

「うん……いちようだれだか気になるし……。」

「じゃあ昇降口で待ってるね」

「うん。じゃあ行ってくるね」

鞆は放課後の体育倉庫前まで小走りで向かった。

「ばいばい」

(はあくどきどきしたよー)

顔を少し火照らせながら昇降口へ向かった。

「雫」

「ごめん花蓮待った??」

「大丈夫」

「よかった」

「これからカフェでも寄る??ゆっくり話し聞くよ??」

「うん!」

「じゃあ駅前のカフェ行こ!新しくなったっばいし」

「うん!!」

花蓮と雫はたわいもない話をしながらカフェに向かった。

「ふーやつと着いた」

「花蓮の言つとおり綺麗になったね」

「でしょ」

「いらっしやいませ」

「何名さまですか??」

「2名です」

「2名さまはいりまーす」

「こちらへどうぞ」

「えっとケーキセットで飲み物はアイスティーで」

「私はケーキセットでアップルティーで」

「アップルティーは温かいのと冷たいのがございますが??」

「じゃあ冷たいので」

「かしこまりました」

「雫はアップルティーが好きだね」

「おいしいじゃん」

「そうだね」

「で聖夜とはどうだったの??」

「告白されてオツケーした・・・」

「雫はそれでいいの??」

「うん・・・」

「そっか」

「えっもつと言われるかと思った・・・」

「雫なに言ってるのさっ雫がいいなら、幸せになれるならそれでいい」

「うん」

「全力で応援するからね」

「ありがとう」

「相談したいことあったらいつでも言ってね!!」

「うん!!」

「さて雫そろそろ帰る??」

「そうだね」

ガツチャ

「ありがとうございましたー」

「なんかここ変わってケーキ美味しくなった??」

「やっぱり花蓮も思ったんだ」

「うん」

「絶対また来ようね」

「うん」

「じゃあここで」

「うん」

「バイバイ」

「バイバイ」

(さあ家に帰るか)

第3話 帰宅

「ただいまー」

「おかえりなさい」

（お母さんだ……。）

「つかれたー」

「今日はどうだったの??」

「普通だったかな??」

「ねーちゃん!?!?!」

「乗ってるさい!」

稗というのは稗の弟で港中学校に通っている中2だ

「あらあら」

「稗なんか用??」

「いやー明日、国語で辞書使うから借りようと思ってー」

「はいはい……」

「サンキュー」

ガチャ

ばたん

「ふーつかれた」

「粟ーご飯よー」

「わかったー」

ガチャ

バタバタ

「今日はハンバーグだつてさっ」

「そうなんだ。お母さん手伝うよ??」

「あらっ 粟ありがとう^^」

「^^ いただきます」

「今日のハンバーグおいしいね」

「そうか??」

「棗ひどいよ??」
「ていうか今日父さんは??」
「仕事で遅くなるんですって」
「そうなんだ・・・」
「いつもいたのに・・・」
「あとでお父さんの分みんなで作ろうよ!」
「そうね」
「」「ごちそうさま」「」
「おいしかったー」
「じゃあみんなで作りましょう^^」
「棗は皿洗いしててね」
「わかったよ; ; ;」
「ねえお母さんハート型にしようよ」
「それいいわね」
ジュージュー
「できたー」
「うまくできたね」
「棗は皿洗い終わった??」
「終わったよ。まったく人使いが荒いなー」
「まあまあそう言うな^^」
「栗ーお風呂はいつちやいなさい」
「わかったー」
がちゃん
ジャージャー
ポちゃん
「はあく本当にオツケーでよかったのかな・・・?」
「今さら悩んだって遅いけどさっ」
「まあなんとかなるよね!」
ザバー
がちゃん

「棗ーお風呂いいよー」

「ああ。わかった」

バタバタ

ガチャ

バタン

「ふうー熱かった・・・」

ピロリンピロリン

「あっメールきた・・・」

「TO雫」

FROM聖夜

よっ元気か??明日よかったら一緒にかえろっぜ」

「はあ〜」

「TO聖夜

FROM雫

たぶん平気だよ^^明日にならなきゃわかんないけど・・・」

「TO雫」

FROM聖夜

わかった^^じゃあまた明日・・・」

「うちも寝るかな・・・」

カチッ

第4話 日直

ピピピッピピピッ

カチッ

「ふぁー」

「眠い・・・ZZZ」

「雫ー朝よー起きたのー?? 棗も起きなさいー」
「起きてるよー」

「雫ー朝ごはんはトーストでいいのー??」

「うーん」

「わかったーついでに棗に声かけてもらえー??」

「わかったー」

コンコン

「棗ー起きてるの?? 朝だよー」

「わかってるよー」

「早く降りてこいだって」

「うん」

ガチャ

「ふぁーあくびが止まんない・・・」

シャカシャカシャカ

ガラガラ

ペッ

バシャバシャ

「棗ー洗面所使っでいいよー」

「わかったー」

ガチャ

「あれっリボンがない・・・」

ガサガサ

「あっあった」

「かばんかばん」

ガチャ

バタバタ

「おはよー」

「おはよう」

「トーストちようど焼けたわよ」

「あっありがとう」

「コーヒー淹れるけどお母さんは??」

「じゃあお願い」

「わかった」

バタバタバタ

ガチャ

「乗ってるさい!!」

「ああ悪いねえちゃん」

「母さん俺の朝飯は??ご飯がいいんだけど・・・」

「もうできてるわよ」

「おっありがとう」

「二人ともここにお弁当置いておくわね」

「うん」

「ごちそうさまー」

「あら乗もう行くの??」

「うん。今日、日直なんだ・・・」

「そう。気をつけていつてらっしゃい」

「いつてきまーす」

「乗も早く仕度しないと朝練に遅れるわよ??」

「うわっやべもうこんな時間だよ」

「いつてきまーす」

「いつてらっしゃーい」

ガチャ

「ねーちゃん途中まで乗せてって・・・」

「やだよ。重いし」

「じゃあねーちゃんが後ろでいいから。お願い……」

「わかった」

「ちよー飛ばすから」

「いいけど事故らないでよ!」

「わーってるって」

ビューン

「あぶねーギリギリ」

「じゃあねー」

「おうチャリさんきゅー!また後で」

「うん」

チャリンチャリーン

キーがシャン

「着いた」

ガラガラ

「遅くなってごめん」

「おせーよ」

「そう言う悠こそ何時にきたんだしー」

「もう30分前から居ますからー」

「まあ家の近さも違うしーうちのほうが遅いのは仕方がないんだし

ー

「だったらもつと早くに出るよー」

「うるさいなー」

「いろいろ朝あつたの!」

「あっそ」

「うざっ!」

「早く仕事しろよ」

「わかってるよ」

もくもくと仕事をする二人だった。

キーンコーンカーンコーンコーンキーンカーンコーン

ガラガラ

「あれっ二人とも早いね」

「日直なの（なんだ）」

「あはは。ハモってるよ」

「うるせえ」

「もうすぐ授業始まるよ」

「花蓮（T・T）」

第5話 学校

日直の仕事を終えて少したった……。

キーンコーンカーンコーン

「えー38ページひらいてー」

「おい雫教科書見せろよ」

「ええーわかったよ」

机をくつつけた。この時悠は教科書はわすれてなかった……。

キーンコーンカーンコーン

「ちよつと悠！！なんで教科書わすれるの！！」

「時間割まちがえた」

「嘘つけ。悠置き勉強じゃん」

「おーい雫ー聖夜がきたー」

「わかったー岡村ありがとね」

「もうありえないから！！」

そう言い残し悠の許を離れて聖夜に会いに行った。

「よっ」

「よっ」

「最近、西濱と仲いいの??」

「別に……ただ席隣なのと日直と一緒にだけ」

「そうなんだ」

「だから心配しないで」

「うん」

「それはそうとどうしたの??」

「あっ古文の教科書貸して……」

「あっうん。ちよつと待ってて」

「うん。サンキュ」

ト
ト
ト
ト
ト

「はい」

「ありがとう」
「今日古文ないから返しに来るの遅くなってもいいからね」
「うん」
「じゃあ」
「じゃあまた返しに来る」
「なになにー聖夜くんと仲がいいじゃん」
「花蓮うるさい……」
「あらあら最近雫ちゃんが反抗期だわ（笑）」
「もー」
「雫ってあいつと付き合ってたの??」
「そうみたいだね」
「そーなんだ」
キーンコーンカーンコーン
「あつという間に放課後だね」
「うん」
「帰ろっか」
「うん」
「おい雫日直の仕事」
「あつわすれてた……」
「残れよ」
「ええー」
「当たり前だ!」
「しくしく」
「はあー後は日誌だけか……」
「おいさつさとやるぞ」
「わかってるよ!」
チクタクチクタク
「ねえーまだー??」
「うん。なあー」
「なに??」

「おまえって運命信じる??」

「当たり前じゃん」

「なんで??」

「だってここでみんなで会えたのも運命だと思う」

「ふーん」

「そっけなっ……」

「そうか??」

「うん……」

「俺もつとひどいのは返事しないし」

「うわっ最悪」

「うるさい」

「今どこら辺??」

……。

「まだまだじゃん……」

「終わったよ」

「じゃあ窓閉めてかえろ^^」

「なあー」

「なに??」

「なんで聖夜と付き合ってたの??」

「悠には関係ないよ……」

「だよな」

「じゃあうち帰るね」

「俺も帰る」

ガラガラ

「じゃあね」

「おう」

(なんで俺あんなこと聞いたんだろ)

(なんで悠あんなこと聞いたんだろ……)

ミンミン

いつの間にか夕方になっていた。

第6話 体育祭クラス委員

「なんか最近悠と仲良くない？」

「そうかな？」

「うん」

「聖夜くん嫉妬してるんじゃない？」

「どうだろ」

キーンコーンカーンコーン

「ええー6時間目の英語は塩崎先生が急用のためホームルームの時間になりました」

ザワザワ

「静かに、なので今日のホームルームは体育祭について話したいと思います」

「じゃあクラス委員後はよろしく」

「まずはじめにクラス代表を男女各1名ずつ決めたいと思います」

「立候補する人は挙手をお願いします」

「はいはい俺やりたいデース」

ザワザワ

「お前できんのかよー」

「うっせい」

「他にやりたい人はいますか??」

シーン

「じゃあ西濱君に決定で」

「前に出で来て意気込みと進行お願いします」

「了解っす」

トントントン

「ええーこの度クラス代表になった西濱悠です。よろしく」

「まじめにやれよー」

「わーってるよ」

「じゃあまずはじめに女子のクラス代表やりたい人挙手をおねがいします」

シーン

「じゃあ推薦で……」

「栗がいいと思いまーす」

「私も」

「じゃあ栗はいい?？」

「ちよつと栗」

「えっはいいと思います」

(なんの話してたんだろ……ぼつとして聞いてなかった……)

「では女子のクラス代表は栗で」

「ええー!!ちよつと待ってよ……」

「お前いいって言ったる」

「……」

「はいつ決まりー」

「ええー……」

「じゃあ進行進めるよー」

キーンコーンカーンコーンコーンキーンカーンコーン

「じゃあ終わりマース」

「さよーならー」

ガラガラ

「栗ー帰ろー」

「うん……」

「わあー見事なことへこんでんねー」

「笑い事じゃないし……」

「まあまあいいじゃない」

「無理ー」

「しょうがない帰りアイスおごってあげるからね」

「やったー」

こうして栗は悠と共に体育祭クラス代表兼実行委員になった

第7話 体育祭練習

次の日……

「おはよー」

「おはよー雫」

「今日は一日ホームルームだねえ」

「うん……」

「どした??雫ホームルーム好きじゃん」

「そうだけど……今日は体育祭のことじゃん……」

「ああ〜そつかあ」

「はあ〜憂鬱……」

とか言ってる間にホームルームの時間……

「ええー以上で競技のメンバー選抜を終わります」

ピンポンパンポーン

「実行委員は会議室に至急集まってください」

ポンピンパンポーン

「てことで行くぞ」

「はいはい」

会議室で……

ええーでは最後に今年からはじめることになった色対抗応援合戦のダンスのペアについてですが実行委員は実行委員同士でくんでください。あとは背の順で決めちゃってください。

以上で会議をおわりませう。

「はあ〜」

「おらっ帰るぞ」

「わかってるよ……」

最悪……。。。

次の日……

「ホームルームをはじめます」

「ええーまず初めに今年から新たな競技になった色対抗の応援合戦についてですが男女くじ引きで決めたいと思いきりマース」

「ちよつとー背の順って言われたでしょ……」

「いいんだよ別に」

「怒られても知らないから……」

ザワザワ

「ちよー最悪……」

「ヤッター」

喜びの声をあげる者やその逆の者……さまざまな声が聞こえた……

「じゃあ今のでダンスのペアについて終わりマース」

「えつと連絡なんですけど今日の放課後から体育祭の練習がはじまるのでよろしくお願いします」

「お前まじめ過ぎだろ」

「悠は不真面目過ぎ」

「はいはい。すみませんねえ」

とか言ってる間に放課後……。

「春の体育祭だからそんな暑くないね」

「うん」

「栗って春好きだよね」

「うん！ちよー好き！」

「なんでさ??」

「なんか暖かいしほのぼのしてる感じだしそれに匂いが好きなんだよね」

「匂いなんかする??」

「するよ!!」

「そうかなあ??全然わかんないけど……」

「なんか春は暖かくて優しい匂いがして夏は太陽の匂いがして秋は

暖かいようで涼しい感じの匂いがして冬は冷たい匂いがすんだよ！

「！」

「ごめん；；全然わかんないよ；；」

「そっかあ；；あつ放送だ」

「これから体育祭の練習を始めます」

「もうはじめるのか；；」

「がんばろ」

「「イエーイ」「」

かれこれ2時間・・・

「これで終わります」

「おつかれー」

「後は本番だけだね」

「うん！てゆうか練習1日のみとかヤバくない？？」

「みんなでやるのは1日だけだけどHRとかもあるし」

「まあプラマイゼロみたいなの？」

「うん」

「今日は疲れたしお茶して帰ろうか」

「ヤッター。アイスの美味しいお店行こうよ」

「いいよ。もちろん雪のおごりね」

「ええ」

「ウソっだから早く行こっ」

「ひどーい」

「まあまあ」

そうして長い1日は幕を閉じた・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9886g/>

恋模様

2011年2月1日03時32分発行